

「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」について

1. 概要

パリを拠点に活躍した建築家・都市計画家ル・コルビュジエの作品のなかから選ばれた三大陸7か国（フランス・日本・ドイツ・スイス・ベルギー・アルゼンチン・インド）に所在する17資産で構成される。

本資産は建築史上初めて、建築の実践が全地球規模のものとなったことを示す物証であり、各構成資産は近代の社会的、人間的ニーズへ対応した建築の新しいコンセプトを反映し、広い地域に重大な影響を与え、いまだに少なからず21世紀建築文化の基盤であり続けている。

2. 構成資産

【フランス（10資産）】

ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸、サヴォア邸と庭師小屋、ペサックの集合住宅、カップ・マルタンの休暇小屋、ポルト・モリトーの集合住宅、マルセイユのユニテ・ダビタシオン、ロンシャンの礼拝堂、ラ・トゥーレットの修道院、サン・ディエの工場、フィルミニの文化の家

【日本（1資産）】国立西洋美術館

【ドイツ（1資産）】ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅

【スイス（2資産）】レマン湖畔の小さな家、イムーブル・クラルテ

【ベルギー（1資産）】ギエット邸

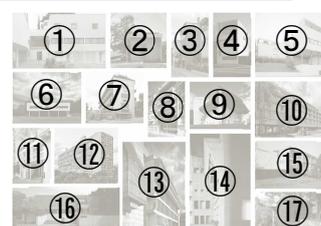
【アルゼンチン（1資産）】クルチェット邸

【インド（1資産）】チャンディガールのキャピトル・コンプレックス



© FLC/ADAGP/AONDH/De Prins/Emden/Kieslowsky/OMG, 2016

①ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸, ②レマン湖畔の小さな家, ③ペサックの集合住宅, ④ギエット邸,
⑤ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅, ⑥サヴォア邸と庭師小屋, ⑦イムーブル・クラルテ,
⑧ポルト・モリトーの集合住宅, ⑨ロンシャンの礼拝堂, ⑩サン・ディエの工場, ⑪クルチェット
邸, ⑫マルセイユのユニテ・ダビタシオン, ⑬ラ・トゥーレットの修道院, ⑭チャンディガールの
キャピトル・コンプレックス, ⑮フィルミニの文化の家, ⑯国立西洋美術館, ⑰カップ・マルタン
の休暇小屋



3. 評価基準

(i) ル・コルビュジエの建築の傑作性：

ル・コルビュジエの作品は、人類の創造的才能を現す傑作であり、建築及び社会における20世紀の根源的な諸課題に対して顕著な回答を与えている。

(ii) ル・コルビュジエの建築が全世界に与えた大きな影響力：

ある期間にわたる価値観の重要な交流を示す。ル・コルビュジエは、新しい建築の概念を広め、20世紀における世界中の建築に大きな影響を与えた。

(vi) 建築によるアイデア（思想）の具現化：

ル・コルビュジエの作品は「近代建築運動」という顕著な普遍的価値を有する思想と直接関連している。

4. 登録に至るまでの変遷

当初推薦では、ル・コルビュジエという人物に主眼を置いていたが、イコモス勧告等を踏まえ、「近代建築運動への貢献」という点に説明の主眼を置き直した。これに伴い、構成資産についても、ル・コルビュジエの建築作品の中で近代建築運動への貢献が顕著に見られるものに絞りこんでいる。構成資産の変遷は下記の通り。

- ・当初の推薦（平成20年）：6か国22資産
- ・追加情報提出時（平成23年）：6か国19資産（当初推薦からフランスの2資産（クック邸、救世軍難民院）及びスイスの1資産（シュウオブ邸）を除外。）
- ・今次の推薦（平成27年）：7か国17資産（フランスに所在する1資産（スイス学生会館）及びスイスの2資産（ジャウル邸、ジャンヌレ邸）を除外。またインドの1資産（チャンディガールのキャピトル・コンプレックス）を追加。）

5. 関係年表

<当初推薦>

- 19年 9月 フランス政府から我が国に対し共同推薦の要請
- 同月 「国立西洋美術館（本館）」を我が国の暫定一覧表に記載
- 20年 2月 第1回推薦（6か国・22資産）
※推薦名称 ル・コルビュジエの建築と都市計画
- 10月 イコモスによる現地調査
- 21年 5月 イコモス勧告（記載延期）
- 6月 第33回世界遺産委員会（セベリア）（情報照会）

<追加情報の提出>

- 23年 1月 情報照会対応文書（実質的には改訂推薦書（6ヶ国・19資産））を提出
- 5月 イコモス勧告（不記載）
- 6月 第35回世界遺産委員会（パリ）（記載延期）

<今次推薦>

- 27年 1月 閣議了解を経て第2回推薦（7か国・17資産）
※推薦名称 ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献
- 8月 イコモス現地調査
- 11月 イコモスとの意見交換
- 12月 イコモス中間報告
- 28年 5月 イコモス勧告（記載）
- 7月17日 第40回世界遺産委員会（イスタンブール）において、世界遺産一覧表への記載が決定